

2007年3月25日 受難節第6主日礼拝

『祈りの共同体』

(詩編32編1～7、ヤコブ5章13～16)

みなさんの中で、苦しんでいる人はいませんか？ 祈りましょう。喜んでいる人はいませんか？ 神をほめたたえましょう。弱っている人はいませんか？ 長老に祈ってもらいなさい。ヤコブは、その手紙の終りに、祈りの大切さを教えています。それも自分一人で祈るだけでなく、祈ってもらうこと、互いに祈りあうことのすばらしさを伝えていきます。

人生には苦しみがつきものです。体の病気、心の悩み、信仰の試練など。苦しみに出会うとき、わたしたちは祈ります。できるなら、この試練から逃れさせてください。あるいはこの試練に打ち勝つ信仰を与えてくださいと、神に祈ります。信仰に基づく祈りには、力があります。キリストの名によって祈るとき、その祈りは、必ず神に聞かれているからです。

聖書は至るところで、神に祈ることの大切さを説いています。たとえ一人でも、キリストの名によって祈るなら、決して孤独ではありません。そこには、わたしの祈りに耳を傾けてくださる天の父がおられます。天の父に、わたしたちの祈りを届けてくださる御子キリストがいます。祈るとき、わたしたちは天の父を身近に感じ、キリストがわたしたちのすぐそばにいてくださることを確信します。祈ることは、大きな恵みです。

ただしヤコブは、祈りはただ自分一人でするものではない。皆で互いに祈りあうことこそ、信仰の醍醐味だと教えています。「あなたがたの中で病気の方は、教会の長老を招いて、主の名によって...祈ってもらいなさい。」「病気の人」と訳されていますが、原文では、「弱っている人」という意味です。病気で体が弱っている人はもちろん、心や魂が弱っている、病んでいる人も、そうです。体の病気はもちろんのこと、信仰が弱っている人がいたら、教会の長老や牧師に祈ってもらいなさい。信仰のことで悩んでいたら、一人で祈るだけでなく、祈ってもらうとよいのです。

牧師をしていますと、いろいろな人から、「祈ってください」と求められることが多くあります。以前おりました教会でも、この教会でも、そうでした。ある日、教会員のご婦人から電話を受けました。「今、試練に出会っています。どうしたらよいのかわかりません。どうか、わたしのために祈ってください。たとえ詳しい事情を明かすことができなくても、いいのです。神様は、すべてをご存じですから。どんな状況にあっても、わたしたちは神様に執り成しの祈りをささげます。」「試練を越える信仰と勇気を、愛する兄弟姉妹に与えてください。』。そうして祈りをささげると、忘れたところに答えが与えられます。ずいぶんあとになってから、感謝の言葉をいただくことがあります。ろくに何も言えなかったわたしのために、祈ってもらえた。そのことが、大きな励ましになったというのです。

このように信仰者には、自分で祈るだけでなく、祈ってもらえる幸いがあります。祈ってもらう、それは決して恥ずかしいことではありません。使徒パウロも言っています。「わたしのために、祈ってほしい。』。信徒だけでなく牧師もまた、祈られるべき存在です。なぜな

ら、神の言葉を伝えるという務めは、本来人間には果すことのできない務めだからです。このことで、感謝に堪えないことがあります。今仕えている教会で、毎日わたしたち牧師のために祈って下さっているご夫妻がおられるのです。70才すぎの信仰者です。とても謙遜な方で、礼拝はもちろん祈禱会をもう何十年も欠かさずに出席されています。このお二人が、いつも祈禱会るとき、祈ってくださるのです。「次の日曜日の礼拝が祝福されますように。特にわたしたちのために、み言葉を取り次いでくださる牧師先生の、説教の準備の上に、主のお導きがありますように。そのご健康がまもられますように。」祈禱会ときだけでなく、毎日、朝夕、牧師のために祈って下さっています。少なくともこの9年間、徳島の教会で説教をしてこられたのは、このご夫妻のお陰だと私は思っています。もちろん、神様の召しと選びがあって、神に遣わされ、神に導かれての務めであることは言うまでもありません。しかし同時に、この牧師は神から遣わされた牧者だ。そういう信仰に立って祈ってくださる信徒の方たちがいる。そうした祈りがあったからこそ、まがりなりにも今日まで牧師として務めてこられたのだと思うのです。

牧師は、教会のために祈ります。教会に集う人々、教会員とその家族、求道者の方々のために祈ります。しかし、教会員のみなさんも、ぜひ牧師のために祈ってください。教会の人びとに祈ってもらえない牧師は不幸です。いえ、そういう祈りのない教会が不幸なのです。ある高名な牧師が、言いました。「自分の教会の牧師のために祈らない者は、その教会で説教を聞く資格がない。」ずいぶん物言いだと思います。そこまで言ってよいのだろうか、わたし自身、疑問に思う位です。しかしおっしゃりたいことは、わかります。つまり、牧師と信徒が、互いのために祈りあうところが教会ではないか。あるいは、信徒と信徒が互いに祈りあう、それこそが教会だ。そうおっしゃりたかったのでしょうか。

ヤコブの手紙が言っているのも、このことです。病気の人がいたら、教会の長老を招いて、祈ってもらいなさいと勧められています。長老というと、教会の中で選ばれた信徒の方々と思われるでしょうが、ヤコブの手紙が書かれた時代を考えると、この長老とはおそらく聖職者のことです。しかし、改革長老教会の伝統から言えば、み言葉にもっぱら仕える宣教長老である牧師と、牧師を支え教会の群れを守る治会長老である信徒長老と、その両方だと考えて差し支えありません。牧師にしる、信徒である長老にしる、神様が教会の中でお立てになった長老たちは、体や信仰が弱っている人々のために、日々祈る務めがあります。これをおろそかにしてはなりません。ヤコブ5章の最後に書かれていますとおり、もし群れの中に真理から迷い出る者がいたなら、その人を真理へと連れ戻すのが、長老の任務だからです。

ただしこの務めは、牧師や長老に選ばれた人たちだけに限定されたものでは、実はありません。なぜならヤコブは続けて、こう言っているからです。16節：「だから、主にいやしていただくために、罪を告白しあい、互いのために祈りなさい。」最初は、長老たちに祈ってもらうように言っていたヤコブですが、ついには、教会に集う者みな、互いに祈りあうのだと、勧めています。そもそも「長老」という言葉は、「年長者」という意味です。みなよりも年かさの者、あるいは年は若いかもしれないけれども、信仰においては一日の長がある

者、など。いろいろに受けとめることができます。すなわち、たとえ牧師でなくとも、教会で長老に選ばれていなくともかまわないのです。信仰生活に一日の長がある人はみな、誰かの長老なのです。たとえば、信仰の父、信仰の母、信仰の兄や姉、信仰の友という言い方があるでしょう。それでいいのです。もし弱っていることがあれば、信頼のできる信仰の先輩や信仰の友に相談できる。そういう人に祈ってもらえる。あるいは、信仰の友から相談を受けて、よし、これからはあなたのために祈っていくよ、と答えることができる。今日もわたしはあの人のために祈る。あるいはあの人から祈ってくれている。それが、どれほど力になるのでしょうか。もう年老いて何の奉仕もできないと思っている方も、祈ることならできます。

互いに祈り、祈られる交わりこそが、わたしたちの教会を形作っていくのです。そうした祈りのあるところにこそ、信仰の癒しがおこる。み言葉に従うなら、血のかよった、恵みあふれる教会がやがて現れることを確信して、ヤコブはこの勧めを書いたのです。

祈りのある交わり、祈りによる共同体。その中心は神であるイエス・キリストです。この祈りは、「信仰に基づく祈り」と呼ばれています。15 節：「信仰に基づくは、病人（弱っている人）を救い、主がその人を起きあがらせてくださいます」。弱っている人のために祈るのは「わたしたち」ですが、人を「救い」、「立ち上がらせて」くださるのは、主なる神様です。神様だけが、わたしたちを救うことができます。そう信じているので、わたしたちは祈ります。キリストの名によって、神に祈り、願い、求めます。

何を祈るのか？ 何を期待して、神に祈っているのか？ それは「罪の赦し」です。今ある苦しみが軽くなるように、病気が少しでもよくなるように。そういう願いも、わたしたちにはあります。そうした祈りを、聖書は決して軽んじていません。けれどわたしたちには、もっと大きな願いがあります。わたしたちの罪が赦されることです。ヤコブは教えています。「もしその人が罪を犯したのであれば、主が赦してくださいませ。」「だから、主にいやしていただくために、罪を告白しあい、互いのために祈りなさい」。まことのいやし、それは「わたしたちの罪が赦されること」です。罪の赦しこそ、神がわたしたちに与えてくださった救いの賜物、永遠のいやしです。神の赦しを求めて、わたしたちは祈ります。「すでに赦されている」恵みに、しっかりと立って生きていけるよう、祈っていくのです。

赦しの賜物をいただくために、「正しい人の祈り」が必要です。「正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします。」「正しい人」の代表として、旧約の預言者エリヤが紹介されています。しかしわたしたちにはすでに、エリヤに勝る方が与えられています。「正しい方」、神の御子イエス・キリストです。キリストは、罪の赦しという「いやし」を与えるため、十字架にかかられました。「彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」（イザヤ 53 章 5）。十字架への道を行かれる中で、「正しい方」キリストは何度も祈られました。まずゲッセマネの園で、「父よ、御心ならこの杯をわたしから取りのけてください。しかしわたしの願いではなく、御心のままに行なってください」（ルカ 22 章 42）。そう祈り、わたしたちの罪が赦されるように、十字架という苦い杯を受け入れてくださいました。

いよいよ十字架の上に上げられたときにも、主は祈りました。「父よ、彼らをお赦しくだ

さい。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23 章 34)。一番苦しいときに、ご自分のためにではなく、ご自分を十字架につけた罪人=わたしたちのために、キリストは祈ってくださいました。

更に十字架につけられる直前に、キリストは、弟子たちのためにも祈っていました。ご自分を裏切ろうとしている弟子のために、こう祈りました。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(ルカ 22 章 31~32)

キリストは、すべての弟子のために祈りました。裏切る弟子たちを目の前にして、彼らが信仰を取り戻せるように。彼らが立ち直ることだけを願い、祈っていました。これが「正しい人」イエス・キリストの祈りです。キリストは、今もわたしたちのために、祈ってくださっています。わたしたちは、いつも、キリストに祈られているのです。自分で祈るだけでなく、キリストに祈られて、今のわたしたちがあるのです。牧師も長老も信徒のみなさんも、祈られています。キリストが、今日も、わたしたちのために、祈ってくださいます。それゆえ、キリストによって赦されたわたしたちも祈りはじめます。自分のためだけでなく、互いに罪を告白し合い、赦し合う祈りをはじめます。こうして「正しい方」の祈りが、信仰によって義とされたわたしたちの祈りになっていきます。わたしたちの歩み、祈りの共同体としての歩みは、ここから新しく始まるのです。

[堀地正弘牧師]